

「相対枠」言語における絶対性： 道案内談話における絶対的指差し

“Absoluteness” in a Relative-Frame Language:
A Case of Absolute Pointing in Japanese Direction-Giving Discourse

片岡邦好

KATAOKA Kuniyoshi

愛知大学文学部

Faculty of Letters, Aichi University

E-mail: kkataoka@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

In this paper I examine the “absolute” tendencies observed in pointing gestures by speakers of Japanese, a language heavily dependent upon the “relative” frame of reference (FOR) in spatial perception/description (Levinson 2003). “Absoluteness” in this case concerns the properties manifested in terms of the absolute FOR, where spatial description is carried out with reference to environmentally or geo-magnetically fixed orientations such as NSEW, where the sun rises/sets, up-river/down-river, etc. While pointing gestures by relative-frame speakers in an “actual” environment were observed to be aligned with gaze and torso orientations (Kita 2003), it is yet to be known whether those pointings are qualitatively and functionally equivalent to those in the “recall” of way-finding experiences. In the “recall” situation (reported in this paper), Japanese speakers used only a few absolute pointings in contrast to the “actual” situation where absolute pointings are heavily utilized by default. However, those absolute pointings exhibited certain features highly characteristic of absolute-frame languages studied by Levinson (2003) and others (e.g. Wilkins 2003, Widlok 1997). By focusing on several features—such as “size” and “gesture space,” “multimodal co-articulation” and “interactional” functions achieved by absolute pointings, I argue that absolute pointings used by relative speakers in recall are more diverse and context-dependent than have been previously assumed (Kita 2003), but may arguably exhibit gradient applications of absoluteness, which are typically and maximally executed in “absolute-frame” languages such as Guugu Yimithirr (Haviland 1993) and Arrernte (Wilkins 2003).

1. はじめに

指差しは日常生活のいたるところで見られる行為だが、本論考では「訪問を薦める場所」への道案内に出現した指差しの特徴を、「空間参照枠」(Levinson 1996, 2003) およびジェスチャー研究 (Kita 2003; McNeill 2005) における知見をもとに分析し、習慣的に相対参照枠に依拠する言語 (以下「相対枠言語」) が呈する「絶対性」を考察することを目的とする。そして日本語のような相対枠言語にも、空間の想起においては「絶対枠言語」に顕著な特徴が垣間見られることを指摘する。

ここで述べる絶対性とは、地理環境や地磁気などが規定する「絶対参照枠」(Levinson 1996) に依拠した空間把握のことである。そして表題の「絶対的指差し」とは、この絶対参照枠にもとづき、手／指／腕などを用いて方向指示を行うことを指す (Haviland 1993; Widlok 1997; Levinson 2003)。我々日本人も、屋外で道案内をする際にはしばしば絶対参照枠を用いる。たとえば経路の教導者が、「あの角を曲がって、まっすぐ行くと突き当たりがあるんで、そこを西に曲がって」などと言いながら実際の移動経路を順次指差す場合がこれに当たる。(この場合、「西」の代わりに「左」を用いたとしても、実際の地理空間を指差すかぎり「絶対的指差し」と考えられる。)

その一方で、道案内の現場から離れ、屋内などで経路を想起する場合、「実際の地理的環境には依拠せずに」空間関係を描写することが主流となる。多くの場合、教導者は観察者や登場人物の視点にもとづき、「前後左右」を用いて描写を行うことになる。¹ たとえば、眼前に地図を想定し、「ここにユニーがあるんで…」と述べながら左方を指差し、「右へずつと行くとマンガ喫茶」と述べて、指差してマンガ喫茶を同定する場合のように、客観的に事物の空間関係を描写する場合は、「相対参照枠」(Levinson 1996, 2003) に基づいていることになる。あるいは、教導者が登場人物 (移動主体) や言及された人物／事物の視点 (第2のオリゴ) に同化して描写する場合は、「内在参照枠」にもとづく描写といえる (同上)。したがって上述の経路は、「ユニーを出たら右折して、道沿いにまっすぐ行くとマンガ喫茶」のように描写することもできる。

こういった場合、ジェスチャーは参照枠の種類を判別するために不可欠である。例えば、「前」と述べる場合でも、教導者の前方を指差しているならば、移動する主体の視点に同化していることになり、よって「内在的」である。しかし、身体前面で右手を手前に引き寄せながら「(ユニーの) 前」と述べれば、これは「相対的」と考えられる。さらに、「前」

¹ ただしこれは日本人を対象とした場合である。Levinson ら (Pederson et al. 1998; Levinson 2003) が世界各地の民族・言語を対象に調査したところ、常に地理的特徴 (山側／谷側, 上流／下流, 陽の登る側／沈む側, など) に依拠した空間描写をおこない、右／左といった空間語彙を用いない言語が多数あることが分かっている。

と述べながらも、「実際の」地理環境を指差ししていれば、「絶対的」でもありうる。その一方で、絶対語彙（「東西南北」）を用いることが絶対的認知の条件とは限らない。例えば「北」と述べながら指差した方が地理的な北ではなく、眼前に想定した仮想地図の北である場合は、観察者の視点に立った表現であるために「相対的」な描写である。これらの例からわかるように、空間語彙はあくまで運用中の空間参照枠を特定するための手助けとはなっても、絶対的な指標ではない。² したがって、ある場面でどの空間参照枠が利用されているかを同定するためには、空間語彙の存否に加えて付随するジェスチャーの分析が欠かせない。

上述のように、「現場」での絶対的指差しはデフォルトとして頻出するが、「想起」においては大変まれである（具体的な頻度については後述）。これは絶対枠言語の語りとは全く異なる。その典型例として、Haviland (1993) が分析した Guugu Yimithirr の語りの分析がある。これは、同一話者が異なる機会に、九死に一生を得た海難事故について語った内容にもとづいている。この語り手は初回と2回目の語りにおいて別の方角を向いていたにもかかわらず、船が転覆するときの船首を同一方角に向けて（ゆえに異なる回転ジェスチャーを用いて）描写したのである。つまり、語り手の視点からではなく、いずれも地理的／絶対的な方向性に依拠して過去の体験を想起し、絶対参照枠にもとづいて対象物の動作・様態を描写したことになる。これは極端な例と映るかもしれないが、絶対枠言語の話者は、さまざまな認知操作において相対枠言語の話者とは有意な差を示すことが報告されている (Pederson et al. 1998; Levinson 2003)。

ここでひとつの疑問が生じる。確かに日本語（さらに多くのアジアや西洋の言語）では、場面を「想起」して語る場合に相対／内在参照枠を多用するのだが、絶対参照枠は「現場」以外では用いられることはないのかという点である。実は、まれにはあるが日本語の想起にも出現する。以下の例をご覧ください（図1）。



図1. 「絶対的指差し」の例

² この点で Kataoka (2005) の分類／分析とは若干異なる。そこでは文字による描写に焦点を当てて、認識の基点（オリゴ）が空間移動の主体にある場合は「相対的」（例：「200m 直進，右折」），他の主体や事物にある場合は「内在的」（例：「○○駅前 200m」），コンパスの方位にもとづく「東西南北」による場合は「絶対的」（例：「ユニー北 300m」）と分類した。

これは筆者のかつての研究室（愛知県三好町）で撮影された映像の一部である。語り手（右側の男性）は、斜め左手前方を指差したのち「徳重の交差点わかる？」とたずね、道案内を始めている。ここで指された方向は、確かに現在位置から見て「徳重（名古屋市）」のある方角であった。

本稿で考察するのは、日本語のような相対枠言語の話者が、経験の想起において用いる絶対的描写にはどのような特徴があるのかという点である。ジェスチャーをも含む絶対的描写は、いかなる環境においても常に絶対的な方角を認識していなければ用いることができないため、相対枠言語の話者には大変奇異なものに映る（例えば井上〔2002〕における「東の奥歯が痛い」等の描写を参照していただきたい）。しかし、Guugu Yimidhirr の語りにおける絶対的思考ほど習慣化されていないにせよ、日本語話者も経路の想起（つまり一種の「語り」）においては絶対的な認識を談話に埋め込んでいる。そこで本稿では、日本語の経路描写における現場性と想起性の差異を確認し、相対枠言語と絶対枠言語の身体的な実践形式が対立／排他的な関係にはなく、相補／連続的な移行を示すことを例証し、相対枠言語で絶対的描写を行うことの潜在的な誘因を検討する。

2. 語りにおける指差し：従来の知見

本稿の絶対的指差しの分析は、近年の言語人類学的な空間認知に関する研究（Levinson 2003）とジェスチャー研究（McNeill 1992, 2005, ; Kita 2003）にその多くを負っている。前者からは、ある種の空間参照枠の優先的使用とそれに対応する言語的／非言語的表出方法の類型が明らかになっている。Levinson ら（Pederson et al. 1998; Levinson 2003）の研究によれば、それぞれの文化で優先的に用いる空間参照枠には大別して2つの類型があり、それは絶対参照枠と相対参照枠であると考えられている。主な西洋言語や日本語は相対参照枠に依拠する言語であり、自己の視点にもとづき、空間を上下・前後・左右に分割して認識することが規範である。（話者自らが移動の主体となって経路説明を行う場合〔つまり固有枠にもとづく場合〕は、往々にして身体前面や移動主体の進行方向に指差しが起こる。）もちろん「東西南北」のような絶対参照枠による描写も混在するが、使用のコンテキストがかなり制限されている。このような制限されたコンテキストの一つが道案内という行為である。

道案内は日常に頻出する行為であり、環境や物理的要因に作用される認知方略を知る手がかりとして広く研究されてきた（例えば Hart & Moore 1976; Taylor & Tversky 1996; Golledge 1999: ただしこれらはジェスチャーの考察はしていない）。³ 同時に、ナビゲーションを含む広義の道案内は、典型的に起点と着点を持つため、道案内を一つの語りとみなして

³ 人間の空間認知能力の発露として、民族固有のナビゲーション方略もこの分野の重要な研究対象であるが、本稿では触れない（Lewis 1976; Hutchins 1995; Widlok 1997; 野中 2004 など参照）。

分析する例も多い (Linde & Labov 1975; Filipi & Wales 2004)。しかし、語りをジェスチャー (特に指差し) という観点から分析した例は, Marslen-Wilson, Levy, & Tyler (1982) や McNeill (1992) らの研究を除くとほとんど例を見ない。例えば Marslen-Wilson, Levy, & Tyler (1982) では、記憶からマンガ本の内容を (マンガ本は手元に置いたまま) 語ってもらうというタスクを被験者に課し、登場人物への指差しの出現頻度を調査した。その結果、エピソードの冒頭における登場人物への指示には指差しが 100% 付随したのに対し、エピソード内の指示では 40% にしか付随しないことが判明した。つまり指差しは、語りの冒頭で指示対象の確立を促進し、談話構築に特化した機能を担わされていたのである。また McNeill (1992: 216–217) では、日常会話においても、新情報や談話トピックの確立の際に抽象的な指差しが生じやすく、トピック確立後には比喩的なジェスチャーに取って代わられる点を指摘している。また片岡 (2005, 2006) は、空間参照枠と目的地までの距離・経路の複雑さが相関することを主張し、語り冒頭における絶対枠の「舞台設定」的機能を指摘した。⁴

人間の指差しは発達的にも言語に先行し、高等類人猿の行う (擬似) 指差しとは異なる極めて人間的な行為であるとされる一方 (Butterworth 2003)、幼児期には高等類人猿と同様に地理環境に依存した絶対枠への傾倒を示し、その後の成育環境や当該言語／文化で慣例とされる参照枠に社会化されるという説もある (Huan et al. 2006; Gentner 2007)。これが事実であれば、「語り」という人類にとって根源的な言語活動において、相対参照枠に社会化された話者にも絶対枠の残滓が見られる可能性を示唆する。このような意味で指差しは高度に社会的な行為であり、コミュニケーションにおける原初的な (よって稚拙な) 指示手段であるという認識は明らかに誤りといえよう。

また、指差しと認識されるジェスチャーは、非西洋言語まで含めると言語文化的な差異が見られる (Haviland 1993, 2003; Kendon & Versante 2003)。例えば、指差しは必ずしも人差し指のみでなされるわけではなく、さまざまな手の形態や利用される身体部位 (たとえば唇) における変異がみられる (Sherzer, 1973; Enfield 2001; Wilkins 2003)。また、指差しには単に指し示すという機能だけでなく、語用的前提に基づく指標作用により、創造的に新たな指示対象を創出する (例えば、空席を指差して慣例的にそこに座る人物を指標する) こともある (Haviland 2003)。さらに Enfield, Kita, & de Ruiter (2007) は、指差しの「形態」に社会的・語用的機能を認めている。例えば、小さく素早く発せられる S(mall)-ポイントは、指示的に曖昧で、重要度が低く、オプションであるために、低コスト、非公式で、押し付けがましくなく、先制的な語用的特徴がある一方、B(ig)-ポイントには主要で前景化された情報

⁴ 語りにおいては、往々にして広範な状況設定から始まり、徐々に物語り空間内の行動主体の視点へと、求心的に描写が進むことが多い。つまり典型的には、最も広範な絶対的視点から、特定空間への相対的視点へと移行し、最終的には事物や行動主体の内在的視点に収束するという過程を経ると考えられる。同様の相関関係は、看板上の道案内描写にも確認できる (Kataoka 2005)。

を提示する機能を認め、指差しの形態に情報調整機能が付随すると提案している。

以上のように、従来は相対枠言語のジェスチャー研究が主流であったことから、語り手主体の指差しに特化する傾向が強かったが、それに対する反省と近年の絶対枠言語話者にみられる認知的差異への関心から、絶対指示や絶対的ジェスチャー／指差しへの関心が高まってきた (Widlok 1997; Pederson et al. 1998; Levinson 2003)。しかしそのほとんどは、実験的な環境または地理的な「現場」において、空間刺激に対する反応の抽出に終始している (図2: 各特徴を結ぶ実線の太さは従来の研究実績を示す)。また、絶対枠言語話者の空間描写の特殊性についても、Haviland (1993) の考察以降注目を集めてはいるものの (例えば Widlok 1997; Haviland 1998; Wilkins 2003)、日常的な語りの分析はそれほど増えていない。さらに、日常環境で相対枠言語の話者が用いる絶対的指差しの分析については、Kita (2003) を除いてほとんど例を見ない。言うまでもなく、相対枠言語話者の「想起」にもとづく道案内 (広義の「語り」) に発現する絶対指示の考察については皆無に近い。

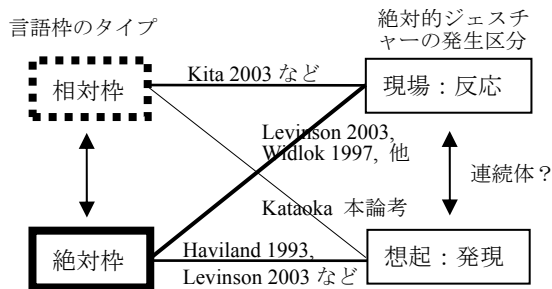


図2. 言語枠と絶対的ジェスチャーの関連

この点で、本研究は参加者に道案内というタスクを課してはいるものの、相対枠言語話者による自然発生的な絶対的指差しを扱う点で新奇性を持つ。ただし、本研究では、相対枠か絶対枠か、といった二者択一的な特徴を峻別することが目的ではない。以下の議論からもわかるように、言語枠のタイプに付随する特徴は連続体をなしていると考えられる。同様に、「現場」か「想起」かという問いも場面へののめり込みを考慮すると一概には決められない面がある。しかし一つ明らかな点は、相対枠言語話者のパフォーマンスにも、絶対枠言語に特徴的な現象が段階的に見られることであり、図2における「言語枠のタイプ」同様に「絶対的ジェスチャーの発生区分」にも段階的な実現形式が出現すると推測される。

3. データおよび分析方法

今回分析するデータは道案内の「現場」で生じた指差しではなく、経路の想起や語りにおいて出現した絶対的指差しであり、実際の地理的環境から離脱した場所で出現したも

のである。まず参加者は、データ収集用の部屋がある建物に入ってからその部屋に至るまでに、4回以上の右折または左折を経ている。(部屋に入る直前に外の景色を垣間見た可能性はあるが、外界の全貌を見渡せる区間はない。)さらに、本データを収集したのは外界の視界を完全に遮った室内であり、参加者がその室内に入ってから終了まで、屋外の風景を見ることはなかった。

データ収集への参加者は、1例(既婚女性ペア)を除き筆者の勤める大学の学部学生または大学院生であり、親しい友人とのペアによる自主的な参加にもとづいている。その内訳は、男性ペア8組、女性ペア7組の計30人であった。⁵ 参加者には対面あるいは横並びで椅子に座ってもらい、「パートナーにぜひ知って／行ってもらいたい場所への道案内」のち、「死にかけたり非常に恐ろしい目に遭った体験」を語るように求めた。この指示の後、30～40分後に戻ると告げて依頼者は退室した。データ収集後には簡単な質疑応答を行い、各自の記憶にもとづいて出発地点から目的地への略図を描いてもらってデータ収集を終えた。全てのペアは10～20分程度を道案内の語りに、15～20分程度を臨死体験の語りに費したが、今回の分析は道案内の語りに焦点を絞ったものである。収集された映像データは合計400分以上にのぼり、今回使用するのはその前半約200分に当たる部分である。

本論考では、Levinsonらの述べる相対的／絶対的指差しの特徴をもとに、経路の「想起」における絶対的指差しは、絶対枠言語における指差しと相対枠言語における現場の指差しの要素が融合した形で出現することを確認する。これにより、現場の道案内における絶対的指差しと想起における絶対的指差しは質的に異なりながら連続体を形成する点を強調する。

4. 分析と考察

日本語のような相対枠言語においても、「現場」の道案内では絶対的指差しがデフォルトとして頻出する(Kita 2003)。Kitaが示したように、現場での指差しの特徴は、距離に応じた腕の仰角、指差しに伴う身体ひねり、視線配布などが、ある種の言語描写と同期する点にある。その結果、指差しと身体ひねりは協調的に左右の選択を促進したり、視線が不可視の目標地点を指差すための微調整に用いられることが判明した(Kita 2003)。日本語における現場の道案内では、まずは相対枠と絶対枠の整列のために身体の回転が起こり、絶対枠による屈折方向が計算された後、左右いずれかの身体意識が活性化されて、「左右」の選択が促されるという。本稿で考察するのは、この過程の冒頭の部分、つまり相対枠と絶対枠の選択にかかわる過程である。

その一方で、絶対枠言語の「現場」の指差しについては、Widlok (1997), Wilkins (2003)

⁵ ただし1組の男性ペアはタスクを誤解し、目的地への経路描写ではなくその場所に関わる体験談や思い出話に終始した。よって本データから除外し、後に別のペアからデータを追加収集した。

などの研究に見られるように、相対性言語とはやや異なる特徴も散見される。これらの特徴を総括して、Levinson (2003: 251–266) は絶対的ジェスチャー（特に指差し）の特徴を以下のように指摘している。

1. ジェスチャーが大きい
2. 両手を用いることが多い
3. 完全な「3次元」システムを用い（McNeill が述べるような、「身体前面にある薄い円盤状のメモ用紙」上の行為ではない）、身体を透過した背後への指差しも起こる
4. 正確な針路を含む複雑な移動の連鎖が、一つのジェスチャーで示される
5. 正確で固定的な方位だけでなく、高さによる距離の表示（目的地が遠い場合は高いジェスチャーなど）が許容され、全体的な「地図」が維持される
6. 視線が方位指示的機能から解放される（つまり指示方向を見ない）
7. 同様に、そのような「非身体化」された空間把握においては、体幹が比較的固定されている（つまり身体のひねりが起こらない）
8. アイコニックかつ方位的情報が、（事物の固有の）方向を具現せずに融合することがある
9. 上述のシステムには、その慣例化の仕方において緻密な並行現象がみられる
10. 上述のシステムは、さまざまな特徴によって特定される相互行為的コミュニケーション上の明白な役割（例えばジェスチャーの／による「訂正」）を演じる

ここに述べられた 10 項目すべてが本データに観察されたわけではないが、2, 3, 8, 9 を除く 6 項目についてはほぼ確認することができる。そこで本節では、語りにおける絶対的指差しは相対性言語でも確かに生起する点を確認し (a)、続いて上記項目 1 と 5、項目 6 と 7 を統合し、そこに項目 4 と 10 を加えて (b)～(e) と再定義することで、相対性言語（日本語）の道案内にみられた絶対的指差しの特徴を浮き彫りにする。

- (a) 絶対的指差しは相対性言語の語り（道案内）においても確かに生起する
- (b) 絶対的指差しは概して大きくて高い（あるいは「身体前面の円盤」を逸脱する）
- (c) 絶対的指差しは視線や体幹との同調を前提とせず、身体中央線をまたいで生起し易い
- (d) 絶対的指差しは正確な針路（方位）を維持しつつ移動の様態を描写しうる
- (e) 絶対的指差しは相互行為上の機能を併せ持つ

以上の点から、Levinson (2003) の唱える類型的相対性は実践的絶対性の浸蝕に晒されていること（ただし片岡〔準備中〕の考察に見られるように、この浸蝕の程度は一過性の可能性もある）、ゆえに「相対」と「絶対」の境界は類型的な必然性に抗して状況的に流動的であることを指摘する。

4.1 絶対的指差しは相対枠言語の語りにおいても確かに生起する

データ収集に参加したペア数，男女毎のペア数と配置，選ばれた話題数（目的地点の数），継続時間（分：秒）の合計は以下の通りである（表 1）。（ただし，語りの途中で中断されたものは集計に含めていない。また，指差しと類像的（アイコン的）ジェスチャーは区別が困難な事例が多く，「相対／内在的指差し」の生起数は参考にとどめていただきたい。⁶⁾

表 1. 指差しジェスチャーの性別および参照枠別集計⁷⁾

		男同士（8 ペア） （45 話／ 83:53）	女同士（7 ペア） （35 話／ 108:27）	小計	総計
相対／内在的指差し	対面（9 ペア）	219	194	413	652
	横並び（6 ペア）	112	127	239	
絶対的指差し	対面（9 ペア）	3	1	4	11
	横並び（6 ペア）	4	3	7	
小計		338	325		663

まず，ここで述べる「指差し」には，登場人物の視点に立った指差し，仮想空間への指差し，眼前に想定した地図への指差しなどが含まれる。これらは表中の「相対／内在的指差し」に該当し，McNeill (1992) が述べる「観察者／登場人物の視点」にもとづくナラティブ層での指差しや，構築中の語りそのものへ言及といったメタ・ナラティブ層での指差し機能を併せ持っている。さらに，自分や相手への指差しも「相対／内在的指差し」に含まれている。こちらは直接語りに関わるのではなく，語りの場における参与者間の関係性を調整する機能を持ち，McNeill がパラ・ナラティブ層と呼んだレベルで機能するものである。今回考察した絶対的指差しは，観察者の視点にも登場人物の視点にも依拠せずに事物への指示機能を担う点で例外的であり，McNeill らの語りのジェスチャー研究においては深い考察の対象外となってきた事例である。

まず表 1 から，McNeill (1992, 2004) の分類をもとに集計した絶対的指差しは，全データ中の指差し 663 件のうち 11 件（1.7%：片岡 2004 で分析した臨死体験談における絶対的指差し 1 件を含む）しか生起していないことがわかる。また，総計 80 あった話題（つまり目的地までの経路描写）の継続時間は，30 秒程度から 10 分以上に及ぶものまで多岐にわたり，

⁶⁾ McNeill (1992) ではアイコン的ジェスチャーと直示的ジェスチャー（指差し）を異なるタイプとしているが，Levinson (2003: 260) や Wilkins (2003) は Iconic と Deictic が絶対枠言語では区別できないことを指摘している。その後 McNeill (2005: 268) では，指差しを行う動作には preparation から execution に至る時点で必然的に方向性を伴っており，動作や移動を示すアイコン的ジェスチャーと明瞭に区別できないことが指摘されている。

⁷⁾ Kita (2003) の分析では，現場での道案内のため教導者は比較的自由に身体の向きを変えて視線や身体のひねりとの協調をもとに道案内を行ったことが報告されている。そのために，「相対／内在」や「絶対」といった区分ではなく，「非整列的絶対ジェスチャー」「整列的ジェスチャー」「非整列的相対ジェスチャー」の 3 つに分類している。

継続時間の合計は約 192 分 (1 話につき平均 2 分 30 秒弱) であった。ただし、ある目的地 A の話題から一旦脱線し、他の場所 B への言及の後に再び目的地 A に言及が及んだ場合は (A → B → A)、本題からの一時的な逸脱と考え、3 話ではなく 2 話として集計した。総じて、絶対的指差しの頻度は女性 (約 108 分で 4 回) よりも男性 (約 84 分で 7 回) の方が、対面 (9 ペアで 4 回) よりも横並び (6 ペアで 7 回) の方が高い印象を受けるが、均質な条件ではないため厳密な統計上の比較検討は難しかった。いずれにせよ、日本語の道案内談話における絶対的指差しが非常に稀な現象であることは明らかであろう。

このように生起数は限られるものの、この稀有な現象に共通すると見られる特徴もいくつか浮かび上がった。それは、Kita (2003) の観察した現場における絶対的指差しの特徴にとどまらず、Levinson (2003) が提案する絶対辞言語の指差しにおける特徴 (上記 (b)～(e)) をより顕著に反映するものであった。

4.2 絶対的指差しは概して大きくて高い

Levinson が指摘する絶対辞言語の指差しの特徴について、本データにも見られた顕著な要素はその大きさと高さである。まず、今回観察された全 11 例 (図 3 (1)～(11)) を以下に挙げる。R は右側の参加者、L は左側の参加者を指す。各画像は指差しジェスチャーのストローク時に腕／指が最も伸びきった状態で捉えたものである。また、画像中の矢印は、焦点となる絶対的指差しの「準備期」から「ストローク期」までの軌道を図示したものである (煩雑になるのを避けて「撤回期」は割愛した)。画像の下には、指差しと同期した発話が記載されており、下線部は指差しの「ストローク期」(stroke) と「維持期」(hold) (McNeill 1992, 2005) を含む期間を示している。また、発話の休止時間は 10 分の 1 秒単位までカッコ内に示してある。太字になっているのは直示表現または固有名 (地名) の部分であるが、この点は別稿 (片岡 [準備中]) にて詳細に論ずる。



(1) R: あのー (0.8) 愛大のところから



(2) R: まずう (2.2) 徳重の交差点わかる？



(3) L: (2.5) あ、鶴舞線乗って黒z-



(4) L: だって近鉄はあっち行くじゃん



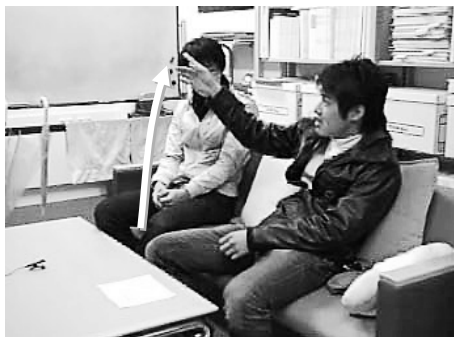
(5) R: だからここを出て



(6) L: (R: …ここを出て=) =ずーっと



(7) R: そしたらあー (0.6) あの (0.3) なに西友の前通って



(8) R: あれがね あのー愛大のさ (指を振る)



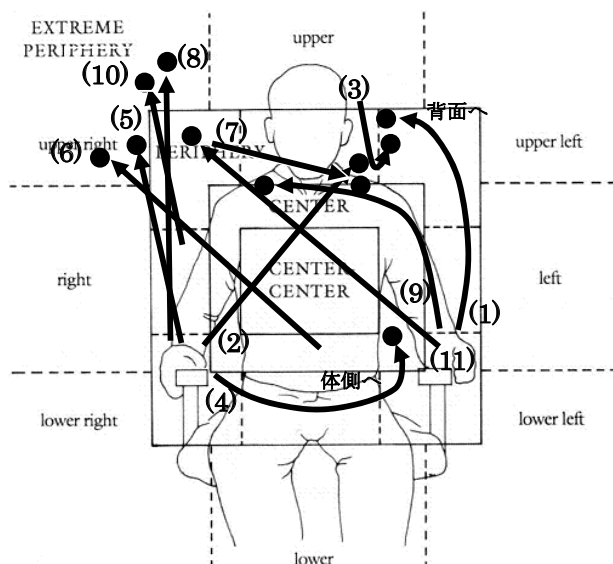
(9) L: うんうんうんあそこひたすらまっすぐ行って



(11) L: だいぶ向こう? あのお小牧東の辺じゃない?

R: [うんうん =そこ。

そして図3(1)から(11)までのジェスチャーの軌道と生起位置を正面図にまとめたのが図4である。



McNeill (1992: 86) はデフォルト的なジェスチャー空間を、「話者前面の薄い円盤」状の空間と呼び、ジェスチャーのタイプによって用いられるジェスチャー空間の傾向が異なると述べている。まずアイコン的ジェスチャー (iconics) は、主に図4における Center-Center 空間で、そして比喩的ジェスチャー (metaphorics) は Lower-Center 空間で頻出し、直示的ジェスチャー (deictics) は時として Periphery 空間にまで伸びる一方、ビート・ジェスチャー

(beats) は個人差を伴いつつ特定の場所に集中するという (同上: 88)。直示的ジェスチャー (指差し) については、英語話者の場合半数近くが Periphery 以遠であり、10% 強が肩より高い位置で生起していた (McNeill 1992: 91)。とはいえ、ジェスチャーが生起するのは典型的に身体前面であり、文化差はあるにせよ身体正面から離脱して側面や背面で行われることはほとんどないとされる。

本稿では、ジェスチャーの高さについて Wilkins (2003) や Kita (2003) の分析をもとに、指先の到達点が肩より高い位置 (upper periphery) で生起したか否かで判断している。この基準に従えば、11 例中、図 4 (4) を除く 10 例すべてが Periphery 以遠かつ肩より高い位置で実施されており、ジェスチャー空間の中でも鉛直線上方の周縁に集中していることがわかる。(ただし (4) については、実施位置こそ低く周縁的ではないにせよ、指先が体側に回りこんでいる点で、「身体前面のメモ帳」と描写される典型的ジェスチャー空間から逸脱している。) この比率 ($10/11 = 91\%$) は偶然にも Kita (2003) の調査結果とほぼ一致している。ただし、語りを題材にした McNeill (1992: 91) の英語話者の場合 (約 10%) と比べると非常に高いことがわかる。さらに 11 例中 4 例は Extreme Periphery で生起しており、こちらも McNeill の調査結果 (約 20%) の倍程度の頻度となっている。

一方、Kita (2003: 314-315) では絶対的指差しの半数以上がひじを伸ばしきった形態で実施されたのに反して、本データでそのような事例は、図 3 (10) のみである。この点で、「現場」の場合は「大きさ」における拡張軸の奥行きが長いのに対し (Kita 2003)、今回の「想起」においては浅く薄い平面 (ただし上空) で生起していることが伺える。

4.3 絶対的指差しは視線や体幹と同調せず、身体中央線をまたいで生起し易い

今回のデータでは「高さ」と「場所」以外に稀有な特徴がいくつか見られる。まず英語話者の場合、体側、背面へのジェスチャーは非常にまれであるとされているが (McNeill 1992: 86)、図 3 (1) と (4) では明確に、図 3 (5) と (11) でも不明瞭ながら観察される。さらに Kita は、指差しと視線との協調も指摘しているが、図 3 (6) と (8) を除く 9 例では、視線とジェスチャーは非協調的であり、語り手は指差しの方向を全く見ていない。これは Levinson が指摘する絶対的ジェスチャーの大きな特徴の一つである。

Kita (2003) による現場での日本語の道案内では、身体のひねりと指差す腕および視線との協調が典型的に出現することを指摘している。しかしこのような事例は今回 7 例中 1 例のみ (図 3 (6)) であった。また、方向指示ジェスチャーのほとんどが「身体を中心線をまたがない (ipsilateral) ジェスチャー空間」で起こったとされるが (Kita 2003: 316)、本データでは身体を中心線を跨いで実施されたものが 11 例中 5 例 (図 3 (2), (4), (7), (9), (11)), 手のひらが見えるほどに腕を上げたり反転させて側方や背面を指差した例が 2 例あり (図 3 (1), (5)), 11 例中 7 例が実施形式において極めてまれなジェスチャーに分類できる。(ただ

し Levinson が指摘したような “transparent body” といった現象—英語や日本語で「自分」を示す胸や鼻への指差しが、実は背後方向への空間指示であること—は見られない。) 身体の中心線を跨ぐということは、言い換えれば、方向指示の際に体幹が腕と同調せずに固定されていることを示す。この結果が示す限りでは、現場の道案内で典型的に観察される視線と身体の協調はほとんどみられず、絶対枠言語の指差しに見られる特徴が優勢となっていることがわかる。

一方で Levinson (2003: 258), Kita (2003), 片岡 (2006) の指摘に沿った現象も確認できる。彼らの観察にあるように、経路の最初の分節については(地理的に)正しい方向を示しても、右／左折以後は視点を移行して身体の直面する方向を進行方向と認識することになる。その場合、当然のことながらジェスチャーも地理的な絶対的方向と一致する必然性はなくなる。この一連の流れは、語り／経路描写の冒頭で絶対的ジェスチャーが出現し、順次「相対／内在的」な方向性にもとづくジェスチャーに移行するという現象と合致している。しかしながら、いくつかの点で、想起における絶対的指差しは現場における指差しとは異なる点がみられる。

4.4 絶対的指差しは正確な針路(方位)を維持しつつ移動の様態を描写しうる

この命題が意図する点は、絶対枠言語のジェスチャーにおいては絶対的な方位や地理環境と一致した針路を維持しつつ、傾斜・勾配や進行方向が描写されるということである。この点は、Haviland (1993) や一連の空間認知テスト (Levinson 2003) の観察に見られたように、話者がどちらを向き、どこに位置していようと、描写された対象の絶対的方向性が常に維持されたことから推測できる。今回のデータでは、傾斜や勾配、移動の様態を描写したジェスチャーが数例観察されたが、どれも内在／相対参照枠にもとづく描写であった。ただし以下の事例に見られるように、地理的方角と内在的關係を厳密に投影したジェスチャーが上述のペア(図3(5)–(7))に見られた。

まず、図3(5)、(6)は間断なく出現したものであるが、実は図3(6)以降もRによる絶対的指差しは継続している。このRによる絶対的指差しは、Lによる絶対的指差しの介入(図3(6))により一旦中断されたが、その後さらに19秒間継続している(一連の移動経路を示しているため1回の指差しと考え、図3ではそれ以降を割愛した)。この一連の指差しと発話をまとめたものが図5である。さらに、Rの右手による一連の絶対的指差しを詳細に描いたのが図6である。

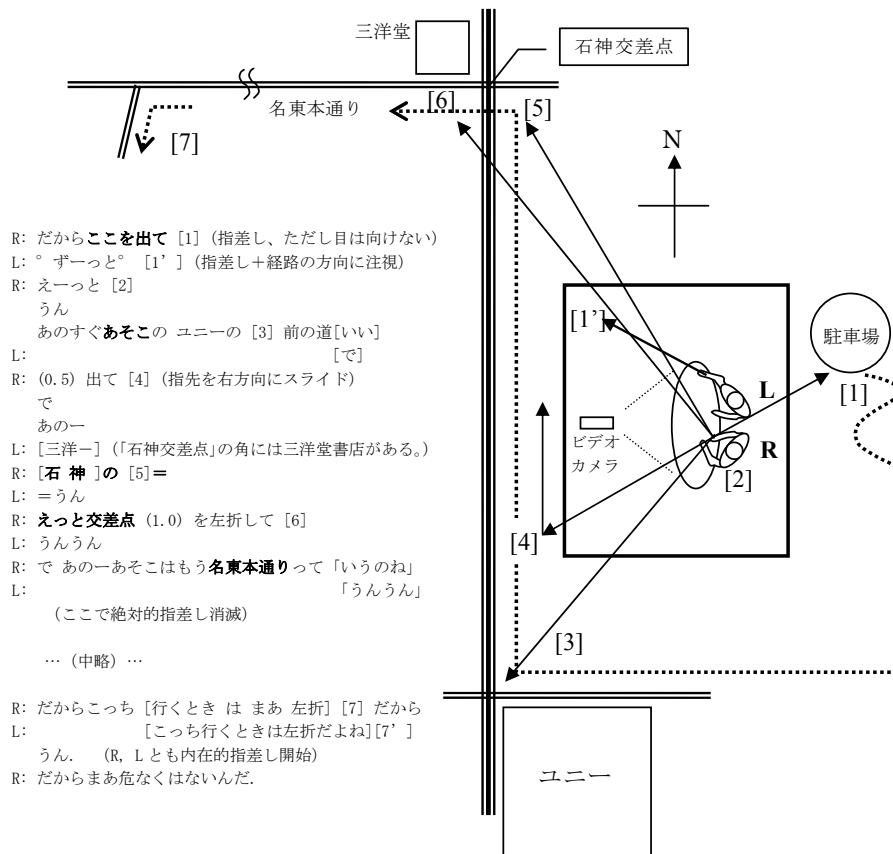


図 5. R の絶対的指差しによる経路の連鎖

* 図中の矢印は指示対象：破線は道案内で描写された経路

** 矢印に伴う番号はテキスト中の該当箇所を示す

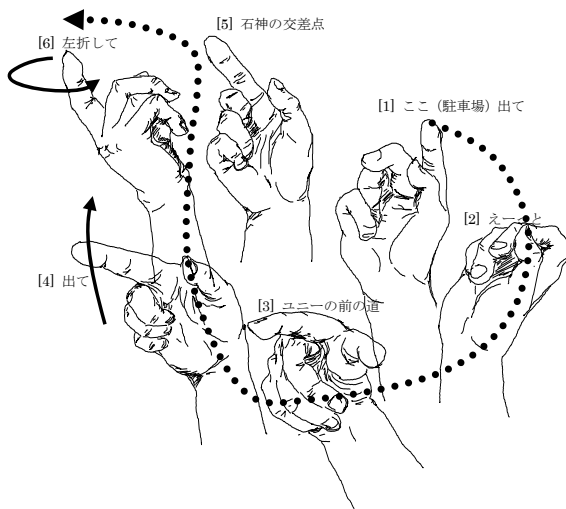


図 6. R による絶対的指差しの連鎖

この一連のジェスチャーと同期した発話と、地理環境への指示を合わせてみていこう。この道案内は R の実家への経路を説明するためのものである。L は以前そこを訪問したことがあるが、詳細な経路は覚えていない。まず R は、「混雑を避ける行き方」と「通常の行き方」があると述べ、前者の説明を開始する。まず R は、「ここを出て」図 5・6 [1] と発しながら手の平を返して駐車場を指差す（ただし「駐車場」とは述べない）。L は大体の方向を認識しているため、この時点で「ずーっと」と小声で述べながら R の自宅方面に続く道を指差す（図 5 [1]；上述の図 3 (6)）。ここでは指差しと同時に視線もその方向に向けている（今回のデータ中では稀な事例である）。この L の介入に伴い、R は「えーっと」と思案しながら駐車場を指差した手を一旦丸め（図 5・6 [2]）、「道いい」の引き伸ばしとそれに続くポーズで次の発話に備えながら、「ユニーの前の道」（図 5・6 [3]）でユニー前の交差点を指差す。この場合も「交差点」との言明はないが、「道（に）出る」という発話から、ユニー角の広い公道に出る移動であることが推測できる。

図 5・6 [4] は「出て」と同期しているが、指先をユニーから石神交差点までの道をなぞるように身体前方から右側面へと移動させている。その到達点は石神の交差点である。ただし、「石神の」（図 5・6 [5]）で指は止まり、「交差点」ではわずかに左回転を始めている。それに続く「左折して」（図 5・6 [6]）で明瞭に左回転が加えられ、指差しの方向のみならず、移動主体である「手」の方向までもが左折の様態を正確に描写している。ここで用いられる語彙は「東西南北」ではないが、移動経路そのものは地理環境に則した関係を維持している。この一連の指差しの間、R は指差しの方向を一瞥もせず L を凝視していた。

以上の描写から明らかなように、話者 R の指差しは単に絶対的な地理空間およびそこにおけるランドマークへの指示にとどまらず、その空間を移動する主体（ここでは車両を運転する話者）と一体化している。最後のジェスチャーにおける興味深い点は、単なる左方への屈折を明示するだけにとどまらず、左折によって移動主体に生じる内在的方向性の変化も克明に描写していることである。つまり、右手全体が車輛の比喩的な投影物となり、指先が車輛の先端で右手の付け根が後尾に対応しているのである。このことは、語り手が単に人差し指を進行方向にスライドさせただけでなく、「石神の交差点」と発した時点で手の平が反転していることから推測できる。そして「左折して」と発すると同時に、右手の平全体に捻りを加えて左折後の前後関係を正確に維持しているのである。実演するまでもなく、このような捻りを加えた空間関係の維持は、単なる指差しによる経路指示よりも運動機能に負荷のかかる行為である。つまり、この絶対的ジェスチャーは地理環境とそこを移動する主体の正確な進行方向および内在的関係を同時に満たす、重層的なパフォーマンスであったといえよう。

仮にこれが、単なる内在的／相対的描写であったとしたらどうであろうか。実は、これこそがこの左折の後しばらくして出現した描写なのである（図 5 [7] および [7']）。そこにおいては地理的方向性への一致は認められず、進行方向を「前」として「右」と「左」を決定するか（内在的描写）、テーブル上に指先で道路をなぞって仮想地図を構築し、そこへの

指差しによって方向を描写したのである（相対的描写）。

4.5 絶対的指差しは相互行為上の機能を併せ持つ

絶対的指差しは、地理環境における指示対象の方向や位置を同定する機能だけではなく、相互行為における社会的機能を果たすためにも用いられる。（絶対的ジェスチャーの相互行為的機能については Levinson (2003: 264) において指摘されているが、具体的な分析は提示されていない。）上述のデータ中で、このような絶対的ジェスチャーが3度（可能性として4度）確認できる。その最も顕著な例は、画像（11）の参加者Lが「だいぶ向こう？」という発話とともに行った指差しである。この発話は、Rの語りにおける空間描写の最中、Lが詳細な場所の同定を求めた場面で出現している。以下の図7（a）（図3（11）を再録）に示すのが実際の発話状況、そして図7（b）は発話が発せられた現場（X地点）と描写された場所（網かけ部分）とを概念地図上に示したものである。このLによる絶対的指差しは、場所の同定という当初の意図を凌駕し、マルチモーダルかつ相互行為的な社会機能の一つとして行われたことが以下の事実から推測される。

まず、Lはこの指差しを維持するあいだ、一度も目標地点の方向に目を向けておらず、身体を中心線をまたいで実施された点で、現場での指差しとは大きく異なる。また、典型的な一本指による指差しとは異なり、具体的な目標物を同定しないまま、腕全体によって抽象的な方向性が示されている（cf. Wilkins 2003）。そして何より、これ以外の絶対的指差しの「ストローク期」と「維持期」を合わせた持続時間は平均して1.1秒であるのに対し、約9秒近く腕全体が中空に保持されている。9秒間の腕の保持というのは、日常会話における指差しとしては非常に長い持続時間である。なぜこれほど長時間の保持が可能だったのだろうか。これを検証するために、一連の連鎖を見てみよう。

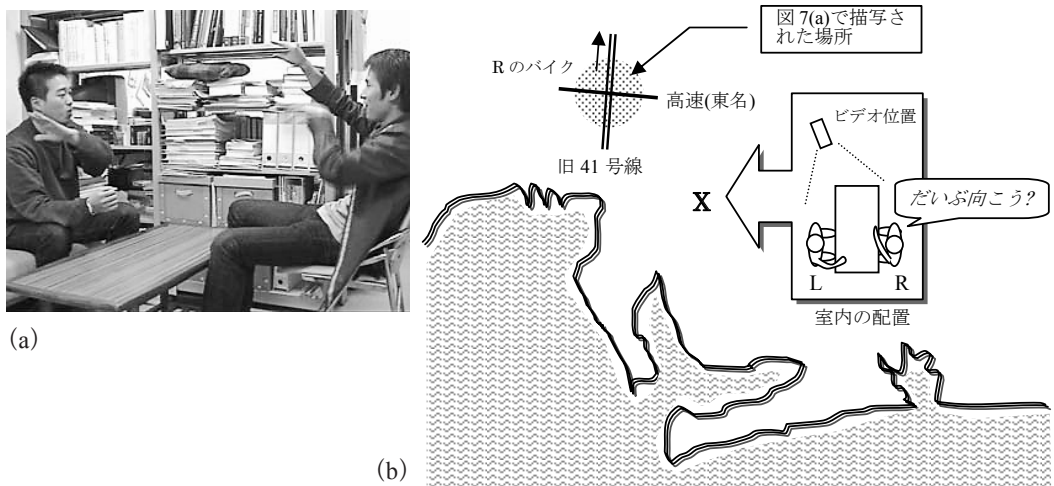


図7. Lの絶対的指差し「だいぶ向こう?」(a)とその生起状況(b)

図7において、Lが「だいぶ向こう？」という発話で絶対的指差しを開始した時点で、Rは旧国道41号線と高速道路の関係をまだ上空で描写中であった。Lの質問に対してRはどう反応すべきか逡巡しながら、右手を保持したまま左手を太もも脇に降ろした。これにより空間描写の中断が示唆され、引き続きLからの「小牧東の辺じゃない？」と「味岡とかの辺じゃない？」という位置の同定要求に対して、Rは回答を提示する立場におかれることとなった。恐らくこの時点で、Rの右手には高速道路を指示するという当初の機能は消滅している。Lの介入に伴い右手の指示機能が不活性化し、指示の連鎖が途切れてしまったためであろう。しかし、Lの絶対的指差しも回答を求めて保持されたままであるので、Rの右手は指示対象を失いLの左手（場所の同定要求）に呼応する回答機能を持たざるを得なくなったと考えられる。

Rは2.0秒の思案の末、「あ！」と“change-of-state token” (Heritage 1984) を発して右手を頭上に持ち上げ、「味岡までは」と述べながらさらに高く保持して「行かないんですよ」で深くお辞儀させた(図8-1)。このお辞儀は「行かない」という発話と同期しており、「味岡近辺ではない」という「否定的回答」として提示されている。(この点でエンブレムとしての「おじぎ」とは質的に異なる。)



図8-1. 「R：味岡までは行かないんですよ」



図8-2. 「L：味岡の手前つくらいかな」

また、Lはこの時点まで単に左腕を高く保持していただけでなく、指先をピンと伸ばしている。つまり、自らの質問が「生きて」おり回答を要求していることの指標となっている。しかし「味岡までは行かない」という返答を受け取り、「味岡の手前つくらいかな」と見解を訂正して、伸びていた左手の平を軽く握った(図8-2)。この動作によりLの疑問点が払拭されて理解を達成したことが示され、「わかる わかる わかる わかる」と同意を繰り返し、2.3秒後に左手を顎の位置に復帰させて逸脱部分が終了した。

以上からわかるように、一見単なる指差しと思われたジェスチャーは、実は絶対的方向指示、長時間の保持と回答要求、理解の達成としての「おじぎ」といった一連の機能を重層的に兼ね備えている。つまりRとL両者は、暗黙の了解の下で本来の指示機能に相互行

為機能を随時上書きし、一連の「質問⇒要求⇒了解」のマーカ―に転用したのだと考えられる。これまでも視線やジェスチャーがターンの維持に用いられたり (Goodwin 1980, 1986), 割り込みを制するために利用される事例が報告されているが (Streeck & Hartge 1992), この場合は絶対的指差しが、方角指示という機能に加えて発話行為の持続と終了、否定の承諾マーカ―として作用し、発話とともにターンの受け渡しにも寄与していることがわかる。

また、本稿では紙面の都合で詳述しないが、図3 (5) と (6), (8)–(9)–(10) における連続的な絶対的指差しは、最初の指差しの出現に対する共通理解と共感の指標 (つまり同一の空間的・認知的オリゴを共有したこと) として集中的に運用されたと考えることも可能であろう。少なくとも以上の分析から、このような絶対的指差しには、方向指示に限らずさまざまな相互行為上の機能が随時「プリコラージュ (何でも屋)」的に (Levi-Strauss 1968) 埋め込まれ、常に揺れ動くその場の状況認知に即応する形で援用されていると考えることができる。

5. まとめと今後の課題

今回の絶対的指差しの分析で明らかになった点は、従来の絶対的ジェスチャー研究を補足し精緻化するのに役立つであろう。まず、Levinson (2003) の述べる絶対的指差しの特徴は、絶対枠言語に特有のものであるというよりも、相対枠言語においても (稀ではあるが) 観察できるものであった。特に日本語における経路の「想起」においては、絶対枠言語における指差しと相対枠言語における現場の指差しの要素が融合した形で出現することを確認した。

具体的には、Kita (2003) が日本語における「現場」の道案内で観察した指差しと視線と身体の内ねりの協調は、「想起」における道案内ではほとんど確認されず、Levinson (2003) が述べる絶対的ジェスチャーの特徴を色濃く反映する現象——特にジェスチャーと視線の独立、身体の内ねりの欠如と中心線をまたぐ指差しなど——が見られた。また、地理環境と移動経路、そして主体の内在的方向を同時かつ正確に投影する多機能な指差しも見られ、Haviland (1993) における絶対枠言語話者の語りを髣髴とさせる事例も見られた。しかしいずれの場合も、絶対的指差しが一般的な指差しよりも大きく、さらに高い位置で実施される点では共通していた。また、本データは自然発話に近い特徴があるため、発話行為や相互行為的な指標へと転用された絶対的指差しの事例も検証した。これにより、現場の道案内における絶対的指差しと想起における絶対的指差しは、質的に異なりながらも連続体を形成する点を確認することができた。

しかしながら残された課題も多い。現場の道案内においては絶対枠の活性化が顕著であるが、この特徴はどの程度普遍的なのだろうか。果たして想起においても必須の条件なのか。また、従来の道案内分析は、参加者による一度きりのパフォーマンスをもとにしてい

るが、本研究のように繰り返し道案内を重ねることで見えてくる特徴も多々ありそうである。特に本稿では、絶対辞言語における指差しの特徴との比較検討が中心であったため、共起する発話の分析が不十分である。特に、絶対的指差しは絶対語彙の使用（「東西南北」）とどのように共存し、住み分けているのか。そしてそのとき身体にどのような表象が現れるのか。次稿においては、こういった点をさらに深く考察する予定である。

参考文献

- Butterworth, George (2003). Pointing is the royal road to language⁴ for babies. In Sotaro Kita (Ed.), *Pointing: Where Language, Culture, and Cognition Meet*, pp. 9–33. Mahwah, NJ: LEA.
- Cassell, Justine & McNeill, David (1991). Non-Verbal Imagery and the Poetics of Prose. *Poetics Today* 12(3): 375–404.
- Enfield, Nick J. (2001) “‘Lip-Pointing’: A Discussion of Form and Function with Reference to Data from Laos”, *Gesture* 1 (2): 185–212.
- Enfield, Nick J., Kita, Sotaro, & de Ruiter, J.P. (2007). Primary and secondary pragmatic functions of pointing gestures. *Journal of Pragmatics* 39(10): 1722–1741.
- Filipi, Anna & Wales, Roger (2004). Perspective-taking and perspective-shifting associably situated and collaborative actions. *Journal of Pragmatics* 36: 1851–1884.
- Gentner, Diedre (2007). Spatial cognition in apes and humans. *TRENDS in Cognitive Sciences*
- Golledge, Reginald (1999). Human wayfinding and cognitive maps. In Reginald G. Golledge (Ed.) *Wayfinding Behavior: Cognitive Mapping and Other Spatial Processes*, pp. 1–45. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Goodwin, Charles (1980). Restarts, pauses, and the achievement of a state of mutual gaze at turn-beginning. *Sociological Inquiry* 50(3–4): 272–302.
- Goodwin, Charles (1986). Gestures as a resource for the organization of mutual orientation. *Semiotica* 62(1–2): 29–49.
- Hart, Roger A. & Moore, G. T. (1973). The development of spatial cognition: A review. In Stea, R. M. D. a. D. (Eds.), *Image and environment*, pp. 246–288. Chicago: Adeline.
- Haun, Daniel B.M. et al. (2006) Evolutionary psychology of spatial representations in the hominidae. *Curr. Biol.* 16, 1736–1740.
- Haviland, John B. (1993). Anchoring, iconicity and orientation in Guugu Yimidhirr pointing gestures. *Journal of Linguistic Anthropology*, 3(1), 3–45.
- Haviland, John B. (2000). Pointing, gesture spaces, and mental maps. In David McNeill (Ed.), *Language and Gesture: Window into Thought and Action*, pp. 13–46. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haviland, John B. (2003). How to point in Zinacantan. In Sotaro Kita (Ed.), *Pointing: Where Language, Culture, and Cognition Meet*, pp. 139–169. Mahwah, NJ: LEA.
- Heritage, John (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson and J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, pp. 299–345. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hutchins, Edwin (1995). *Cognition in the Wild*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kataoka, Kuniyoshi (2005). Variability of spatial frames of reference in the wayfinding discourse on commercial signboards. *Language in Society* 34(4): 593–632.
- Kendon, Adam & Versante, Laura (2003). Pointing by hand in “Neapolitan.” In Sotaro Kita (Ed.), *Pointing: Where Language, Culture, and Cognition Meet*, pp. 109–137. Mahwah, NJ: LEA.
- Kita, Sotaro (2003). Interplay of gaze, hand, torso orientation, and language in pointing. In S. Kita (Ed.), *Pointing: Where Language, Culture, and Cognition Meet*, pp. 307–328. Mahwah, NJ: LEA.

- Levi-Strauss, Claude (1968). *The Savage Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levinson, Stephen C. (1996). Language and space. *Annual Review of Anthropology* 25: 353–382.
- Levinson, Stephen C. (2003). *Space in Language and Cognition: Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press
- Lewis, David (1976). Route finding by desert Aborigines in Australia. *Journal of Navigation* 29(1), 21–38.
- Linde, Charlotte, & Labov, William (1975). Spatial networks as a site for the study of language and thought. *Language*, 51, 924–939.
- Marslen-Wilson, William D., Levy, Elena & Tyler, L. K. (1982). Producing Interpretable Dialogue: The Establishment and Maintenance of Reference. In R. Jarvella and W. Klein (Eds.), *Speech, Place, and Action*, pp. 339–378. Chichester: John Wiley and Sons.
- McNeill, David & Duncan, Susan (2000). Growth points in thinking-for-speaking. In D. McNeill (Ed.), *Language and gesture*, 141–161. Cambridge: Cambridge University Press.
- McNeill, David (1992). *Hand and Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- McNeill, David (2005). *Gesture & Thought*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Pederson, Eric; Danziger, Eve; Wilkins, David; Levinson, Stephen C.; Kita, Sotaro; & Senft, Günter (1998). Semantic typology and spatial conceptualization. *Language* 74: 557–589.
- Roth, Wolff-Michael, & Lawless, Daniel V. (2002). When up is down: Body orientation, proximity, and gestures as resources. *Language in Society* 31, 1–28.
- Schegloff, Emanuel A. (1984). On some gestures' relation to talk, In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, 266–296. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sherzer, Joel (1973). Verbal and nonverbal deixis: the pointed lip gesture among the San Blas Cuna. *Language in Society* 2(1): 117–131.
- Streeck, Jürgen & Hartge, Ulrike (1992). Previews: Gestures at the transition place. In Auer, Peter and di Aldo Luzo (Eds.), *The Contextualisation of Language*. Amsterdam: Benjamins.
- Taylor, Holly A., & Tversky, Barbara (1996). Perspective in spatial descriptions. *Journal of Memory and Language*, 35, 371–391.
- Wilkins, David (2003). Why pointing with the index finger is not a universal (in sociocultural and semiotic terms). In Sotaro Kita (Ed.), *Pointing: Where Language, Culture, and Cognition Meet*, pp. 171–215. Mahwah, NJ: LEA.
- 井上京子 (1998). 『もしも右や左がなかったら』大修館.
- 喜多壮太郎 (2002). 『ジェスチャー：考えるからだ』金子書房.
- 片岡邦好 (2006). 『語り』における空間描写—言語とジェスチャーのマルチ・モーダルな詩的分析に向けて—愛知大学言語学談話会編『ことばを考える5』pp. 77–106. あるむ.
- 野中健一 (編) (2004). 『野生のナビゲーション：民族誌から空間認知の科学へ』古今書院.